
If in pop'n music

D - Dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I f i n p o p ' n m u s i c

【Nコード】

N 3 3 0 6 Z

【作者名】

D - D r e a m

【あらすじ】

ポップンの俺的二次創作短編集的なものです。各話は（ほぼ）繋がっておりません。もしも要素や俺設定要素が特に強いと思われる作品にはタイトル名に*をつけてあります。また、作者の気まぐれで大量に更新したり、長期間放置したりすると思いますが、ごゆるりとお付き合い下さいませ。（タイトルへの（文法的）ツッコミは胸の奥へしまってください）

＊戦う・魔法・道具・逃げる

＊もしもポップンがロールプレイングゲームだったら

名前：六ろく

職業：書道家、侍

装備：大見解（筆）、一撃必翔（刀）

技能：男々道（物理）、雪上断火（刀）、路男（特殊）

所属：D e s - R O W ・組

能力：攻89 守65 速55

名前：鬼おに - B e

職業：妖霊

装備：なし

技能：深超深T I O N（特殊）

所属：あさき家

能力：攻56 守19 速28

名前：？（はてな）

職業：神の付き人

装備：トライデント

技能：ニエンテ（必殺）

所属：MZDを働かせる会

能力：攻 守 速

「神ってば、？をひいきしすぎー！」

「だって、？はかわいいもんな」

「ハテナは？」

「ハテナは仕事仕事うるさいし、怖い」

「……ご主人ん？ 仕事が溜まってますよ？」

「ハ…… ハテナ……」

「おしゃべりしてる暇はないんですよ？ 仕事が終わってからにし

ましようね？」

「ちょ、まっ…… イヤアアア!？」

「……神、逝ってらっしやい」

「……神の悲鳴って、なんか女の子みたい……」

凜として鳴く猫の如く

「ノワール、どこ行っただのー？ 出ておいでー」

金髪の少女が1人、飼い猫の名前を呼びつつ歩いていた。

「どうしたの、お嬢さん？」

長めの髪。無精髭。

少女に声をかけたのは、あまりにも胡散臭い匂いがする男だった。

「飼い猫が迷子になってしまつて。もうすぐお稽古の時間なのに」

少女は見知らぬ男に話しかけられたにもかかわらず、躊躇なく口を開いた。

5

「それなら、かわりに探しますよ」

「いいんですか？」

「俺、なんでも屋してるんです。Mr・KKのなんでも屋っていうね」

男は商売用の愛想笑いなのか、にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、お願いしようかしら」

「クライアントであるお嬢さんの名前を伺ってもいいですか？」

「ベルです。えつと……　KKさん？」

「おまかせください。ベルさん」

KKはもう1度微笑んだ。……どちらかと言つと、ニヤリといった感じの微笑みだったが。

「ノワールー。どこだー」

ニヤー

「そこか！　待て、猫！」

ニヤーン

どうやら、猫の方が1枚上手なようだ。駆け出したKKの腕の間を黒猫がすり抜ける。

いや、動物の本能がKKの本分をかぎとった、とでも言うべきなのだろうか。

「……ベルさんとの待ち合わせまで、あと10分か」

KKの雰囲気がつつと変わった。

「このお店で待ち合わせだったわよね」

稽古事の終わった私は、そのまま待ち合わせ場所の店へと向かっていた。

『Days』そう掲げられた看板を見て、軽く深呼吸をするとドアを開けた。

「おや？ 初めての方ですね。……ベルさんですか？」

入るなり話しかけてきたのはKKではなく、黒髪の青年だった。青い左目に黄色い右目……そのオッドアイに、なぜか懐かしさを覚えた。

「はい。KKさん……猫を連れた人が来てませんか？」

「来てますよ。KKさん、ベルさんが来ましたよ」

奥の方へ青年が声をかける。KKの返事の変わりに、猫の鳴き声が返ってきた。

「あ、ベルさん。ノワールはこの子であってますか？」

姿を現したKKの腕には、黒猫が抱かれている。

「ええ。ありがとうございます」

KKとかわって、猫を抱いた。飼い主の腕はやはり落ち着くのか、ノワールは少し眠そうにあくびをした。

「あの、お礼に……」

財布を出そうとすると、KKはそれを制止した。

「お礼はかわいいお嬢さんのその笑顔で十分だよ。じゃあ、また」

「あ、ありがとうございました！」

去っていくKKに、慌てるようにお礼を言い直した。

心なしか、顔が熱い気がする。

「彼に惚れると大変ですよ、ベルさん」

笑い混じりのそんな声が、後ろの店主から聞こえた気がした。

いつか宇宙（ ルビ・ネラ ）へ（前書き）

本文中では名前は出てませんが、ライトの話です。

いつか宇宙（ルビ・そら）へ

空が好き。

クジラも好き。

好きな空に近づけるから、飛行機はもっと好き。

「いつか僕の作ったクジラみたいに大きな飛行機に乗って、空を飛ぶんだ」

僕は夢を聞かれると、絶対こう答える。

だって、空が好きだから。

近づきたいから、

少しでも近づきたいから、飛行機的设计図を描く。

難しいことはわからない。

きっと、僕の飛行機はまだ飛べない。

でも紙に“夢”を広げるのは楽しい。

今日も僕の夢を製図に描いていく。

「はやく空に行きたいな」

「いや、宇宙だろ」

イアラムセの訂正が入った。

ニャーと鳴く猫の如く

「……猫？」

「そう。猫」

ケンジの差し出した写真……ではなく、スケッチを俺はまじまじと凝視した。

さすが芸大生。細かい描写の見事なスケッチだ。

……きつと友人に描いてもらったんだろうが。

「人じゃなくて？」

「そう。人じゃなくて」

ケンジはコクリと首を縦に振る。

「同居人捜しっつーから、人だと思うだろ」

「猫だよ。同居してるのは事実でしょ？」

「なんでだろ？」

さつきから、ケンジはまばたきをしていないように思っただが。

あの猫目は怖い。しかも、まばたきしてないし。

「捜してくれるよね？」

だから、その猫目は怖えんだって！

「俺とケンジの仲だしな。……分かったよ。ただし！」

……さすがに、その目が怖いとは言えねえよな。

「俺だって、M r・K Kのなんでも屋で生計たてる以上、謝礼はもらうからな！」

「捜してくれるのなら、僕もちゃんとお礼するよ」

苦笑いしながらもケンジはしっかりと答えた。

「ねこー。おーい、ねこー。……うち、名前がねえってのも面倒なもんだな」

って、俺の言えた義理じゃねえか。

「ねこー」

……M r・K Kのなんでも屋を改名して、M r・K Kの猫捜し屋にするべきか？

この前もベルの飼い猫を捜し回ったし。

1ヶ月の収入は、ほぼそれだけだもんな。

……月に6回も迷子になる猫も猫だが。

「ねー」

……見つかんねえ……。

結局その日は見つからず、あとに聞いてみると……。

「あ、ねこ？　うちに帰ってきたよ」

……そういうことは、早く言ってくれ。

***双子以上オンガク仲間**

「『吉高つよし』と『肥塚つよし』俺たちは2人で1人だ!」

「そうでございますね」

ニシシツと笑う笑顔。

のほほんとした笑顔。

2人のつよしの笑顔。

「僕たちは2人で1人でございます」

サンバイザーと王冠。

タンクトップと王子服。

緑髪と金髪。

共通なのは緑色をした目と名前だけ。

「不思議でございますね。こうして2人で話しているなんて」

「そうだなー。俺たち、元は1人2役だもんな」

苦笑い。

つよしの苦笑い。

「こう考えると、M Z D っ て け っ こ う 凄 い 神 様 だ よ な」

「そうでございます。僕たちを、1人を2人にしてしまつんでございますからね」

楽しそうな鏡合わせ。

双子以上にそっくりな2人。

「じゃなくて でもない、 の2人。

好きなものはいっしょ。

嫌いなものもいっしょ。

趣味も共通 - -

- - 音楽を奏でること。

占うは光 解き放つは未来

見える。

……見えない。

「まただ。また僕の未来だけ、ミエナイ」

様々な色の光が輝く水晶玉が白濁した。

さっきまでの明確なビジョンが消えていく。

僕は必ず当たる自分の占いが嫌いだ。

東西南北過去未来、なんでもお見通し。

でも“ジブン”に関しては何も見えなくなる。

直前までは見えていたイメージが霞んで消える。

時間が経つにつれて、見える時間が長くなってきてはいるんだけど……。

「占い師の方ですか？」

ふと声が聞こえた。

「はい。占いをご希望ですか？」

意識を現実に戻すと、目の前には赤いベールの女性が立っていた。

小豆色の目が微かにベールから覗いていた。

楽器を持っているところから、吟遊詩人をしているのではと推測される。

「いえ…… すみません。なぜだか、懐かしさを感じて」

見ると東洋系の顔つきをしている。

どこかで見たことある気がするが……。

それに、頭上のテールがざわついている。

「もしかして、ファティマかい？」

「やっぱり、アブラハムですね。久しぶり」

彼女の笑顔を見るのはいつぶりか。

「僕が一座を抜けて以来かい？」

「そうね。同じ街にきているなんて、偶然ね」

「水晶玉に導かれたんだ。この街に行くように」

一座に会いたいと願っていた。

占っても一座と会える自分が見えなかったから、諦めていた。

でも、会うことができた。

……これは、偶然なんだろうか？

「1曲聞く？ 再会記念に」

無邪気に笑う彼女。

「そうだね。聞かせてもらおうか」

「何がいい？ GADARINAとか？」

「僕の曲、覚えててくれたんだ」

笑うファティマ。

つられて笑顔になる。

ファティマは座ると、スッと目を閉じた。

あぐらで安定する位置に楽器を置いて、ゆっくりと爪弾き始める。

儚げな旋律が辺りをかける。

1つの楽器だけで奏でられているとは思えない。

いつ聞いても、高い表現力だと思う。

「この曲は、私にとっても大切な曲だから……」

そう聞こえた気がした。

夕飯はきつとカレー

「ごはん」

ジャックが拙い発音で、夕飯の準備を急かす。

「六、どこに旅立ったもんか……」

「ごはん」

「わーったって」

慣れない手つきで、金髪の学生が準備を進める。

料理に付き物の「トントントン」という軽い音ではなく、「ゴトン、ゴトン」と不器用さを際立たせるような音が響いている。

「イテッ」

……いやな予感のする声があがった。

「ゆひふいつはあー（指切ったー）」

「リユータ、大丈夫か？」
だいじょうぶ

リユータは人指し指をくわえながら、うなずいた。

「ら、大丈夫」
だいじょうぶ

……どしどし夕飯にありつけるのは当然あとになりそうだ。

まいにち さつす（前書き）

冒頭の文は、公式のキャラ紹介文から引用しました。

まいにち さうす

だれもしらない なんきよくのうみで

サウスはうたっていたよ

サウスはかぶかぶうたったよ

「 〉 〉 」

だれもしらない なんきよくのうみ

まわりは ペンギンだらけ

あたまのうえには なんきよくてんのはた

「 〉 〉 」

くらげみたいに ゆらゆら

くらげみたいに ふわふわ

「 〉 〉 」

ふえる あわあわ

みえる ぶくぶく

あえる ぶかぶか くらげとともに

「 〉 〉 」

そこにいる

うた うたってる

ことば ない

うた うたってる

「 〉 〉 〉 〉 」

ひびく うた

ひびく こえ

うた うたってる

サウスは うた うたってる

だれもしらない なんきよくのうみで

独白・世界観

「泣きたいトキは笑ってうたっちゃえばいいんだよ」

アタシの口癖。

だって、そう思わない？

やなコト全部、お空の向こうに飛んでっちゃうと思わない？

「……莫迦莫迦しいラブソングだ」

此の世界には莫迦莫迦しいラブソングが溢れかえっている。

窒息してしまいそうだ。

汚れちまつた空気が俺のメガネを曇らせるんだ。

「夏の海と波の音と俺！」

サーフィンが好き。

誰がなんと言っても、サーフィンが好き。

雪はキレイ。

サーフィンもできなきゃ、浜で昼寝もできやしない。

とにかく、サーフィンさいこー!!

「俺達は2人で1人だぜ!」

「僕達は2人で1人でございますー」

????

2人じゃない?

1人2役の間違い!?

そうとも言つかもしれないな。

でも、僕達は2人で1人でございます。

俺達の絆は強いんだぜ。

絶対に切れないのでございます。

学生達の日常（多分）

「興味ないで候」

「えー」

さゆりがナカジをゲレンデに誘っている。

ナカジはバツサリと切り捨てているが。

「いつしよに行こうよー」

「冬は出歩きたくない」

一歩も引かないさゆりとナカジ。

「それにスキー板持ってない、し……」

「なにになにー？ なんの話しい？」

「お前……」

ナカジの言葉を遮る^{さへぎ}ように、ニッキーが現れた。

「ナカジ君をスキーに誘ってるの」

「ふーん……」

ニッキーがナカジをチラ見すると、さゆりの目を見て言った。

「こんな堅物くんよりも、オレとゲレンデ行かない？」

「うーん……。ナカジ君行かないんなら、ニツキーと行こうかなあ？」

その言葉に、ナカジが急に立ち上がった。

「俺が行く」

ナカジはメガネ越しにニツキーを睨み付けた。

「こんなヤツとさゆりをいっしょになんかできない」

「オレ……。そんな嫌われてんの？」

「……まあ、変態だしねー」

タローののんきな声がしめた。

こんな日常。

ウヘコロとジャージがスーッ

「……プッ」

「わ、笑うなー!!」

「だって、スー……クックッ」

金髪を揺らして笑っているのは、金髪ウヘコロ英語教師ことDT
Oだ。

笑われているのは新米熱血元ヤンジャージ教師ことハジメ。

なぜ笑われているかと言うと……。

「お前、スーッ着ると違和感ありすぎウヘッ」

そうなのだ。

いつもジャージにタオルとラフな格好のハジメが、珍しくスーッ
を着ているのだ。

「にしても、ククッ、なんでスーッなんか着てんだ？」

「今日は授業参観なの分かってる？ 中等部の」

言われてポカーンとしたDTOは、すぐさま「分かってます」と
言わんばかりの表情を浮かべた。

「も…… も、もちろん分かつてるコロ」

……分かっていないのは一目瞭然、いや一聞瞭然だが。

「おはよー」

そこにリユータが現れた。

遅刻確定ぎりぎりの時間帯だ。

「おはよう」

「おはよう。リユータ、遅刻するウヘー」

その言葉に、リユータは「は？」と言いたげな表情をした。

「……今日は懇談会で、高等部生は休みなんだけど」

そのリユータの言葉に、今度はD T Oが「え？」という表情を浮かべた。

「……まさか、高等部の教師であるD T Oが知らなかったなーんてあるわけないよね？」

「そ、そそ、そんなことありうるはずがないですらー」

D T Oはフイと目を反らした。

……ポップン学園はこんな教師がいる、平和な学園です。きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306z/>

If in pop'n music

2011年12月21日10時45分発行